

空



2004年

SORA 8号

晴夜 (8) | 2

柴田 佐知子

日だまりに老人がゐて秋祭

小鳥来て枝に足踏みしてゐたる

新しき籠が入りゆく茸山

龍淵に潜む女は長生きす

問ひ詰めしあとの奈落に林檎剥く

山の灯のはなればなれに冬来る

鸚哥掌につつめば熱き白秋忌

障子入れ影豊かなる起居かな

放心に似たる熟考虎落笛

主のちゅうぐ

荒井千佐代

病葉に紅のつのれりマリアの辺

月代や魚籠の魚を海へもどし

川砂の乾き葦まで望の月

秋の雷ルカ伝に愛つまびらか

磔像は頭を垂れしまま野分晴

医学部の被爆遺構よ曼珠沙華



くるまれて赤子の来たる草の花

保母となりし手コスモスと汝に触るる

稲の花なにしてみても眠たくて

かりがねや父亡き部屋の磔刑図

主のごとく萩括られて善丁谷

鳴晴れや湖面を走る風の筋

殉教のわが祖の島のお花畑

祈らむと露けき木椅子拭きもせず

花野の真ん中ちちの魂ははの魂

保育所に勤めて、そろそろ七年になる。姉が退職し、私が代わりに入ったのだが、「妹さんに汚い仕事ができるだろうか」と、採用側が心配していた」と、姉から後で聞いた。

職場では後輩から「荒井先生は、保母ズレしてないからいいですよ」と言われてきた。

「保母ズレ」って、どういうことだろうと思っていた私だったが、今はいくらか解るような気がする。

年功序列で、止む無くリーダーシップをとる羽目になった私は、保護者との問題解決、学内での会議出席、上司への陳述等ひとりで担わされている。保育所からの帰路を運転中、胃がチクチク痛むような日もある。

そんなストレスを解消してくれるのは俳句。続けていてよかったと痛感する。では、俳句のストレスはというと、保育所が解消してくれているように思えるから面白い。

とにかく、曲り形にも二つ三つの事をやれている健康に感謝！！である。

花薄荷

苑
実
耶

髪揺るる長さに秋の来りけり

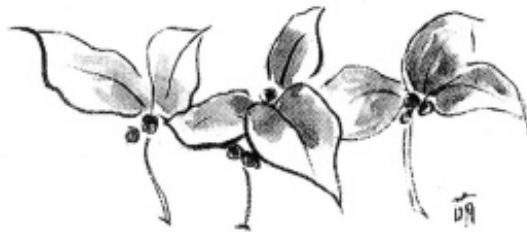
走るやうに父は老いたり花薄荷

針の先ほどの嬰の齒秋涼し

老人に運動会の案内状

高西風や三連水車乾ききり

コスモスを後ろ向かする風生れし



色しろき姉さん女房蓼の花

担ぎては持ち寄る案山子コンクール

親しみし森は更地に秋の風

花八つ手激しき恋は知らざりし

いくたびも色の変りて菊枯るる

朝市にならぶ大根白し太し

人いきれ部屋に満ちたる聖夜劇

きはやかに山褰見ゆる刺羽かな

浮く柚子のどれも小さし乳房より

夫の転勤で、結婚直後から十四年間に北海道に住んだ。南に憧れたことはあっても、北海道など頭の隅にもなかったので、嫌々付いて行つた。故郷はもうすぐ桜が咲こうかという時に、着いた名寄(なよろ)の駅前民家は雪に埋もれていた。その年、四月十八日に大雪が降つて、玄関ドアが開けにくくなった。また、ある年には、十二月二十四日に降つた雪がそのまま根雪になったこともある。

五年目の秋。旭川近郊の神居古潭(かむいこたん)の黄葉に息を呑んだ。それが北海道に居続けるきつかけになった。山菜狩り、牧場を黄色に変えるタンポポ、日高のカタクリの群生、美瑛の丘のじゃがいもの花、落葉松林の茸狩、阿寒の紅葉、雪を被つたななかまどの実、凍滝、地吹雪、氷点下三十四度、ダイヤモンドダスト。

何といつても北海道の醍醐味は冬だと思ふ。

地球

高倉恵美子

裸子を追ひて地球を廻りけり

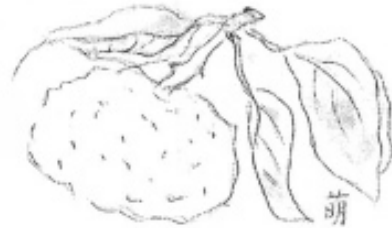
昨日より暑しと今日も夫の言ふ

蚊柱の真中をめがけ水を撒く

田草取り終へて鵜匠になりに行く

十葉の闇の中より匂ひけり

耳鳴りにつくつくほうしの声入るる



ねんねんねんねん酒屋猫
酒屋がいやなら嫁入らさい
嫁入り支度はなになにかい
たんすながもちほさみばこ
そんなに支度がよいならば

百年は生きると言ひし生身魂

友重病なれば

彼岸花かくも真つ赤ぞ友生きよ

友病みて今日が大事や草の花

低く飛ぶ蜻蛉や稲の倒れたる

秋すでに食卓に吹く山の風

大声で呼ばれてをりし秋の虹

厨まで明るくなりし秋夕日

秋暑し墳の祠に刀錆ぶ

月天心耳納連山直立す

いっちご帰るといわんさな

またからアルキにやこらさんな

帰るてつともいわんさな

ねんねこねんねこねんねこよ

この唄は三人の子供達が幼い時、祖母が唄ってくれた子守唄である。当時、腰の丸くなった小さな祖母は背負うことのできない曾孫のために、毎日のように口ずさんでいたのを今でも思い出す。私はこんな子守唄を聞いたことがなかったので珍しい子守唄だと思っていた。村の人でも誰も知らないと言う。祖母は何処で覚えたのだろうかと思っていた。

そのことを新聞に投稿したら、何人の方からお電話を頂いた。みな懐かしいということだったが、その中のお一人が「筑後のわらべ歌」という本を送って来られた。祖母の唄っていた子守唄が確かに載っており、祖母の唄声がよくえつてくるようだった。

祖母は義母より長く生き、九十四才で亡くなった。最後の四年間は老衰で寝たきりだったけれど、私は祖母といろんな話をしたように思う。

初氷

遠野 萌

無月かな村の灯水にしづむごと

鯊釣りの馬穴に丸く泳がせて

鶏頭のごつんごつんと風の中

樹の洞に溜まる木の実は生地かな

立てばすぐ開く扉や神の留守

教室の午後秋冷の椅子並ぶ



風いつも隣家へ流れ金木犀

文化の日「只今マイクのテスト中」

燈火親し脳細胞の皺ふやす

果樹園に首輪の狸太りをり

時雨るるや護符をめぐらす太柱

バナナ売る髭の口上冬うらら

石路の花終生置ある暮し

冬の薔薇ケーキのごとく卓に置く

たてがみの檻の前なる初氷

中田みなみ様、拙い絵をおほめいただきありがとうございます。絵は不得意なのですがカットを担当するようにといわれ、これも勉強と思ってお受けいたしました。

描くようになって以来、もの見方が少しずつ変わってまいりました。庭の花を見てもただ美しいと思うだけではなく、枝の形や花びらの重なり方や反り具合などじっくり観察するようになりました。真直ぐに見ることで、今まで気が付かなかったものが見えたときには、これは俳句にも通じるものであると今更ながらに感じています。

今日は咲きはじめた庭の椿を描いてみるつもりです。